

想うがままに

人生の起点六〇年安保闘争

本誌編集委員 小寺山康雄

二〇一〇年は、現行日米安保条約批准から五〇年、それに抗する未曾有の大闘争六〇年安保闘争五〇周年である。ぼくにとっては世界と日本の変革を志してから五〇年。節目の年である。

入学前からガリ切り ビラ撒き、そして入党

高校時代のぼくは生徒会活動を通じて、管理教育、教師の権威主義に抗う一方で、授業をサポートして酒を飲み煙草を喫う悪ガキであった。乏しい父の金をくすねてレーニン選挙や大月書店の

国民文庫を買う反体制家気取りの不良少年だった。

一浪して悶々としていた自堕落なぼくを覚醒してくれたのは、安保条約改定に反対して果敢に闘っていた全学連の五九年十一月二七日の国会突入、六〇年一月一六日の岸渡米阻止羽田闘争であった。

どこでもいいから大学に入学して、学生運動を思いきりやるんだと決意し、ぎりぎり受かったのが神戸大学文学部だった。こうしてまだ入学していないのに合格発表の日(三月一八日)

から自治会室に入りびたり、ガリを切りビラを撒く日々が始まった。

幸い神戸大学は学生運動の活発な大校だった。ほどなく知ることになるが、自治会は早稲田や立命館らと共に全学連反主流派の拠点で、ぼくを感激させた「国会突入」派とは対立していた。それでも数人いたブント(共産主義者同盟)にオルグされたが、「労働者階級のいないブントはあかん。革命は労働者階級の事業だ」と、えらそうに言っではねつけ「唯一の前衛党」共産党に入党したのも入学前である。

ぼくの家は貧しく、ぼくを大学に進

学させる余裕などなかった。父は神戸市役所の願書を持ってきて「ここに就職せい。大学に行きたかったら自分の金で夜間に行け」と至極まっとうな説教をした。内心では父のいうとおりだと思いつながら、夜間だと学生運動がでけへんやんか。それに募集要項にある「暴力的に体制転覆を図る集団に所属してはいけないこと」に、革命家志望のぼくはひっかつかった。

黙りこくるぼくに、突然母が「大学に行ったらええ。わたしが金をだしてやる」と言ったのだ。母はすでに家計を助けるために三味線名取の腕を生かして料亭の仲居をしていたが、もつと働くと言うのだ。こうしてぼくは念願の革命家としての第一歩を踏み出すことができたのである。しかし、それはまた学歴をつけて階級上昇するという、母の期待を裏切り、働きすぎて健康を蝕むことに母を追いやる親不孝の道へ

の第一歩でもあった。

狭い我が家は、デモが終わってぼくが持ち帰る赤旗とプラカードで足の踏み場もないほどであった。妹と弟が寝静まった深夜に仕事から帰ってくる母であったが、ある日「あんた、共産党に入ったんちがうやろな」と、ぼくに聞いたのだ。ぼくは昂然と「そうや、共産党に入った。革命家になるんや」と言い放った。まさか褒めてくれるとは思わなかったが、母は「わたしはお前を極道にするために働いて来たとちがう」と、気色ばみおいおいと泣き出した。ぼくはなすすべもなく茫然自失した。

ぼくの家は大学に近かったこともあって、腹をすかせた友人がよく来ていた。訪ねてくる友人に誰彼かまわず「ご飯たべた？」と訊くのが母の口癖だったが、自分のいないときのために肉屋、魚屋、八百屋、そして酒屋までツケで買えるようにしてくれていた。

母はたぶん極道息子を許してくれたのだろう。仕事の無理が重なって六九歳になったばかりで早世した母の遺品を整理したとき、兵庫県学連委員長としてデモを指揮し、アメリカ領事館前に座り込んだりした新聞記事、朝日新聞の論壇時評に『現代の理論』に書いたぼくの論文が顔写真入で紹介された。切り抜きなどが、黄色く変色して出てきた。葬儀のときには泣かなかつたが、これには心底参ってしまった。生涯癒えることのないトラウマである。

三度のゼネスト、数百万のデモ 二千万の署名も空しく

四月から六月の二カ月間は、通常の数年に勝る密度の濃い毎日だった。とりわけ岸内閣が安保改定を衆議院で強行採決した五月一九日から参議院で自然承認される六月一九日までの一カ月は、わが人生で最良にして最高に充実した日々であった。

これまでデモに参加しなかった学生も参加するようになり、文字通り根こそぎ動員であった。組織人員が一人一人に満たない県学連だったが、未加盟の文・社会学部以外の関学、商船大、神戸女学院からも多数参加し、一万を超えるデモにふくれあがった。

六月一五日、国会通用門前で樺美智子が機動隊に虐殺されてからの一週間は、無期限スト状態になり、連日デモを練り広げた。ぼくら自治会執行部は徹夜に次ぐ徹夜でピラ、立看板づくりに追われ、いつ食べ眠つたのかわからないほどであった。ついでに言う緊張感なく醜く肥満した現在のぼくからは想像できないだろうが、この頃のぼくは我ながら惚れ惚れするくらい引き締まった精悍な顔をしていた。

公安条例を楯にデモに、あれこれ制限事項を付ける警察が、一六日以降は向こうから電話をかけてきて、どこに集合しどこで解散するのか。参加予定

人員は？ と馬鹿丁寧に訊き、申請書では間に合わないから電話で届出してほしいと、懇願するのである。

ジグザグデモはやり放題。動けない自動車にドライバーは怒るところか手を振ってエールを送ってくれる。道行く人は拍手で迎え、率先して署名、カンパに応じてくれる。校庭や路地では小学生までが隊列を組み「アンポハンタイ」とデモの真似をする。

労働者は六月四日、一五日、二二日と三度もゼネストを打ち、全国数百万、国会包囲十数万のデモが連日続き、安保反対署名は二十万に達した。

アメリカ大統領報道官のハガチーは、アイゼンハワー大統領の訪日の打ち合わせのため来日したが、デモ隊に包囲され、羽田から一步も動けず、米軍のヘリコプターに救出されるしまつであった（安東仁兵衛さんは、この闘争の「首謀者」にでっちあげられ「懲役一年、執行猶予三年」の判決をくらう）。

こうしてアイクの来日は中止され、岸信介は辞職した。安保反対闘争は文字通り国民的闘争になり、彼我の力関係は完全に逆転したのである。

中国文学者の竹内好は闘争を総括して「負けたが勝った。勝ったが負けた。民主が独裁かの闘争では大勝利だった」と評した。これに対して、当時左翼文化人として鳴らしていた清水幾太郎は「安保闘争を民主主義擁護闘争にすりかえる議論」として批判した。

反戦・平和の闘いと民主主義闘争は不可分の関係にあるのであって、決してあれかこれかの問題ではない。日米支配層が支配の道具でもある議会制民主主義ブルジョア民主主義を踏みこじつても強行した安保条約の本質を徹底暴露し、反戦平和・民主主義を謳う憲法の精神に立ちかえった大反撃を展開するべきであった。

しかし、現実の政治過程はそれとは全く逆の過程をたどったのである。

指導部の不在 前衛神話の崩壊

今かと待っていた。

しかし、烽火は上がらなかつた。総評・社会党の日和見主義はいうまでもないが、烽火を上げるべき「前衛党」は、党员と『赤旗』の拡大に全精力を注いだ。「反トロ」キャンペーンと八回大会に向けて党内の綱領反対派退治に躍起になっていた。全学連主流派の指導部であつたブントは四分五裂し、ぼくらが属していた全自連も確固とした展望を持つていたわけではない。

こうした指導部のていたらくによつて、ゼネストを闘つた労働者階級は徹底的に弾圧された。しかし、反撃すべき総評の腰は引け、社会党は動揺し、共産党はなす術なかつた。孤立した労働者階級は萎縮し、それ以降政治ストに対してまったく臆病になつてしまつたのである。

後退したのは労働者階級だけではない。あれだけ広範な層の共感を得た闘争だつたのに、市民もまた平和と民主

問われるべきは指導部の不在であり、「唯一絶対の前衛党」は神話にすぎないことを冷徹に認識するべきであつた。「反安保国民会議は総評、社会党、共産党（オプゾバー）、平和、民主団体が幅広く結集する、いわば統一戦線であつた。当初は「安保は重い」として、おごなりの統一行動をスケジュール的にこなしていた国民会議であつたが、しだいに戦闘的になつていった。そして、反安保闘争の陣形は、組織された労働者階級を核とし、その周囲を学者・文化人・市民が包みこみ、先頭に学生が位置する理想的な陣形を布いた。安保改定は阻止できなかつたが、今後の闘い方によつてはそれを形骸化し、廃棄するための闘争拠点は、東京にとどまらず全国各地に形成され、反撃の烽火が上がるのをひとびとは今か

主義の運動から潮が引くように日常に舞いもどつてしまつた。六〇年一月二〇日の第二九回総選挙は安保闘争の成果がまつたく反映されない結果に終つた。あろうことか自民党は追加公認を含めると三百議席を確保し、自民党としては今日までで最高の議席を得た。それに対して、社、共は低迷した。

日米安保体制は形骸化するどころか、その後五〇年にわたつて再編強化された。日米帝国主義のアジア戦略の要に沖繩が据えられ、沖繩の受難は今日に至るも続いている。

岸退陣によつて暫定的に組閣していた池田勇人内閣は、ここに保守本流として本格的にスタートするのである。

機動戦から陣地戦へ 構造改革派の旗揚げ

池田内閣の「所得倍增政策」は、共産党やブントのいうような一時しのぎの階級宥和政策ではなく、復活した日

本帝国主义の新しい戦略であった。

法と暴力による強権的支配・身分制的位階序列の固定化によって階級闘争を抑圧してきたそれまでの統治から、経済成長至上主義の下に労資を一体化させ、労働者の階級的自立を阻害し、会社人間として企業に自主的に従属させる方向に切り替えた。そして賃金ベースの上昇は認める代わりに、いわゆる合理化は徹底的に遂行するシステムへの転換であった。ブルジョアジーは職場でヘゲモニーを握つたのだ。かつては熟練工を核として、労働者が保持していた労働の裁量権と職場の連帯的仲間関係は「カイゼン」運動やQCサークル運動などを通じて、資本のヘゲモニーの下に解体され、包摂されていった。生産性向上への競争的参加と選別排除のシステムは、繰り返して強調するが、資本による強制ではなく、労働者の自発性を喚起する資本の巧妙な誘導によって職場に根付いて

いったのである。

労働組合は年一度の春闘におけるべア闘争の場には存在しても、日常の職場における資本とのヘゲモニー闘争の場には存在しない。職場が資本の聖域として神聖不可侵になって久しい。六〇年代後半、全共闘、反戦青年委員会運動によって騒然とした状況になったとき、ときの日経連専務理事は「職場の安定した労使関係が崩れないかぎり、この国は大丈夫」と平然といつてのけた。敵ながら言いえて妙である。

そして今日、寒風に裸のまま孤独に放置されたにひとしい労働者は、過労死し、過労自殺に追い込まれている。

復活した本帝国主义はアメリカカとどのような関係(同盟)を追求しようとしているか。アジアにどのような形で進出しようとしているか。国内支配、とりわけ階級支配の新しいシステムはいかなるものか。それらに対応する我々はいかにあるべきか。

新しい革命戦略を練り上げ、それを

担う主体を形成するために、六一年八月、第八回大会を機に、ぼくらは共産党と訣別した。そして、社会主義革新運動を経て、六二年五月、日本で初めての構造改革派の党派である統一社会主義同盟(統社同)を結成した。ぼくは全国委員、学生対策部長であった。

これからの階級闘争、大衆運動は国家の頭部への機動的急襲ではなく、縦横に張り巡らされた市民社会の要塞をひとつひとつ奪取する陣地戦的なヘゲモニー闘争でなければならない。ヘゲモニー闘争の担い手は市民社会の只中であつて、日常、非日常をとわず、自然発生性の中から目的意識性を抽出し、改革を領導する能力の持主でなければならぬ。

統社同の初発の問題意識は充分実践的に検証されないまま、六九年一月三〇日ぼくらの脱党によって構造改革派の党派としてはいったん消滅した。